
戦後広島の都市文化を物語る基町アパートの地下倉庫にある地域資源とその記憶をもとに展覧会の企画をし、記憶の終焉や忘却を「文化の死」ではなく「変容の契機」として捉える枠組みを提示する。

基町アパート6コア自治会





1990年代から放置されていた地下倉庫を資料室へ



2023年プロジェクト前の地下倉庫

お祭りや行事の備品など戦後復興期の生活を物語るもの



- ・役目を終えた自治会備品
- ・活動を終えた団体の備品
- ・商店街の店舗で役目を終えた物品
- ・個人の残置物

団体の解散（高齢化、多様化、パンデミック）

管理者や制作者が不在、不明なために捨てづらい備品たち

本当はもう手放したいが手放せないものへ

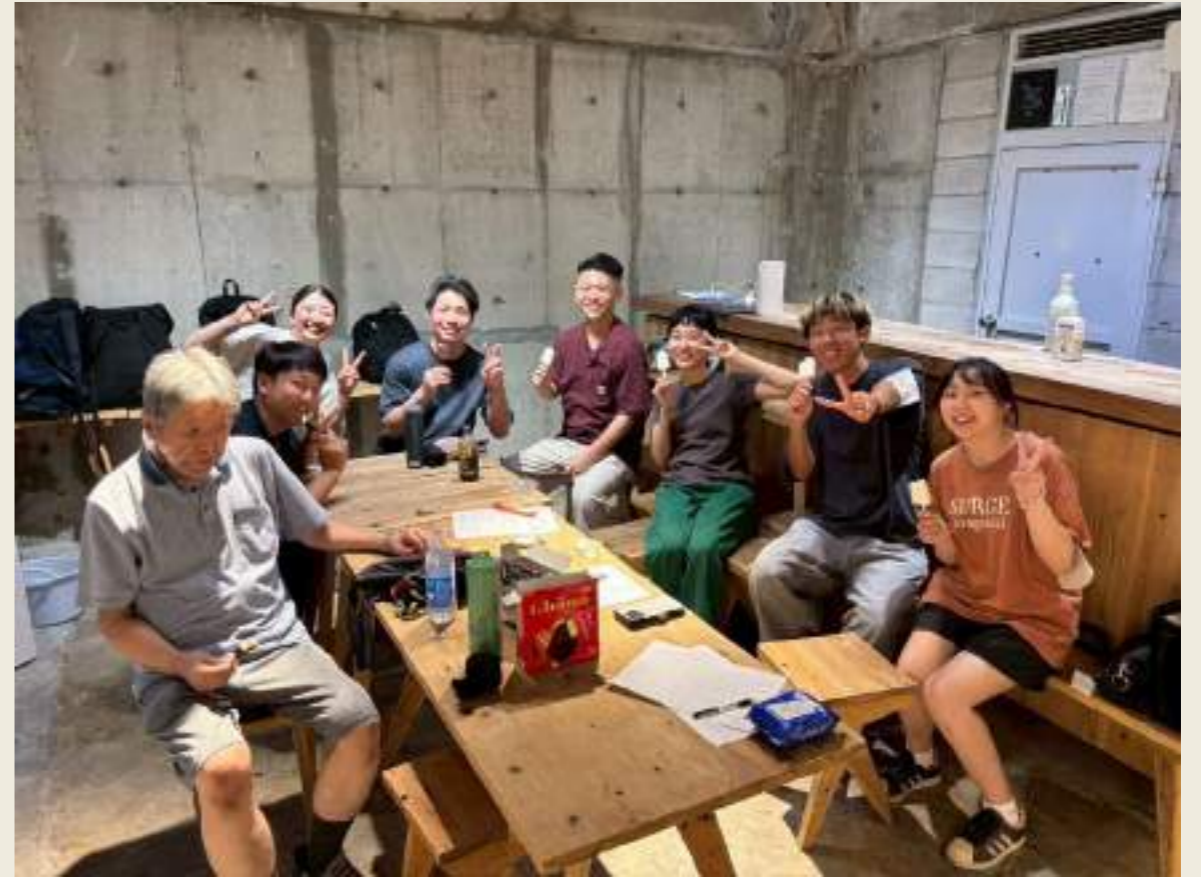
周縁化

復興都市における生活のなかで形成された文化は、次第に閉ざされ、「ないもの」として処理されつつある。

先人たちが残したものは、今を生きる住民にとって「うしろめたさ」を伴う遺物となり、終わりきれないまま放置されている。

2025年7月～8月：展示準備

地下倉庫の展示にむけて、地下倉庫の清掃、展示空間を自治会の清掃員と学生とともに起こなった。



2025年7月～8月：展示準備

また、展示パネル制作や展示告知用のチラシ制作を委託。広報活動をおこなう。

広島基町アパートの地下倉庫展示

「ほんとうはもう手放したい、でも手放したくないものがある」

[ツアーガイド]イタイミナコ
基町アパートで自治会長を務め、街の課題を芸術実践をとおして向き合うイタイミナコが、地下倉庫を舞台に基町の魅力を語ります。

[ツアースケジュール]
9月6日 ① 11:00-12:30 ② 15:00-16:30 ③ 17:30-19:00
9月7日 ① 11:00-12:30 ② 15:00-16:30 ③ 17:30-19:00

[参加費] 500円 *住民の方は無料

[集合場所] オルタナティブスペースコア
(広島県広島市中区基町19-2-448)
※ツアー開始10分前には、オルタナティブスペースコアに集合してください。

お問い合わせ
Instagram
のDMにて
ご連絡下さい。



Instagram ID: @TAMINAKO



<地域の元気応援プロジェクト>

ツアー展示会

「ほんとうはもう手放したい、でも手放したくないものがある」

2025年9月5日・6日

角倉・板垣ゼミとのワークショップ

倉庫に遺された物品群を展示台にならべ、住民からものを通して地域の記憶を掘り起こす。





1 泊2日基町での活動





約30年ぶりに地下倉庫に入る住民が
飲み物のさしいれに。



地下倉庫のものをきっかけに思い出
される戦時中、戦後、復興の話を聞
く。

「もっと基町中のものをあつめて資料館にしよう。」



その他、展示発表



次野三 (2024-2025)

Hiroshima MoCA

FIVE 25/26

Hiroshima City Museum of Contemporary Art
Open Call Exhibition
Theme: Memories

2025 12.20 SAT - 2026 3.1 SUN 10:00-17:00

会場：展示室B-2、B-3
休館日：月曜日(ただし1.12、2.25は開館)、
年末年始(12.27-1.1)、1.15(火)、
2.24(火)
主催：広島市現代美術館

観覧無料 Admission Free



Hiroshima MoCA FIVE 25/26

会期：2025年12月20日（土）～2026年3月1日
（日）10：00～17：00

会場：広島市現代美術館（広島市南区比治山公園1-1） 展示室B-2、B-3

地元メディアによる取材・掲載

10月12日（日）午前8:25～NHK・Dearにっぽん

「“わやな町”に生きて広島 若き自治会長の奮闘記～」

基町アパート地下倉庫での備品整理・展示の実践からの

今後のプロジェクトの展開

地下倉庫での活動を一過性の展示ではなく、持続的な地域プロジェクトへ発展させる
地域に蓄積された記憶を次世代へ手渡し、住民の価値再認識と街の活力創出を目指す

- 周縁化された記憶を昇華し、地域で共有可能な形へ再編する方法の一般化
- 他地域・他団体の実践を視察し、基町での方法の応用可能性を検証する。
→比較を通して、基町の実践の固有性と他地域への展開可能性を明らかにする。
- 実践的知見をもとに、地下倉庫を起点とした担い手育成を進める。
→街の歴史や文脈を案内できる人材の育成につなげる

基町アパート地下倉庫

=

復興都市・基町の記憶を地域に開く媒介

資料室の設置やツアー型展示を通して、住民が地域の価値を再認識し、世代や立場を超えた対話が生まれた。

美術館展示やメディア発信へと接続し、地域に根ざした実践が外部へ展開しうる可能性がある。

一人ひとりの断片的で混沌とした記憶に耳を傾け、受け取る姿勢